

主婦の生きがいに関する調査研究 (I)

— 高校女子教育の基礎資料として —

星 山 セ ッ

主婦の生きがいについての意識を年令別、生活形態別、学歴別に調査し、また、女子高校生の母親の生活態度に対する希望についても調査した。なお、主婦と女子高校生の育児、家事に対する考え方をも調査し、今後の女性の望ましい生き方について検討を加えた。さらに、女子高校生が各自の人生設計をどの程度考慮しているかも調査したが、生徒の関心は乏しく、家庭中心志向型の強さが予想以上であった。これからの社会状況を考えたとき、今後の女子教育、家庭科教育において真に生きがいを感じる女性の生き方についても十分指導される必要があると思った。

I 研究の趣旨

最近、人間の生きがいについて論議が盛んである。その原因として、戦後食べることに精一杯であった時代から、経済の高度成長により、ものを考えるゆとりが生まれてきたこと、また、管理体制の合理化のなかの疎外感、巨大な組織のなかの孤独感に悩む人が、その苦しみからのがれようとする等があげられる。現に家庭の主婦をみても、子供の数の減少、そして、家事労働の機械化、社会化により余暇が増大し、とくに40才以上の後半期において、生活の空虚感を訴える人が多くなってきている。

瀬戸内晴美氏は、朝日セミナーの講義「女の生きがい」についての巻頭に次のように言っておられる。「ある婦人サークルでの講演が終了した時に、50才位の一人の婦人から質問があった。その内容を要約すると、『若い頃に結婚して家庭一筋に生きてきた。主人に内助の功もつとめ、8人の子供も一生懸命に育て、今では主人は会社で重要な地位につき、子供もそれぞれ立派に成人した。そして、何の生活の心配もない今、自分の生涯を振り返ると空しくて仕方がない』と。そして、その場の婦人がいづれもその発言に賛同した。¹⁾」とのことであった。それに似た感想を雑誌や新聞の投書欄に見ることが多い。

また、昨年の当センターの研究から92%の主婦がテレビに余暇時間の大部分を費やしていることがわかり、NHKの調査(1970)からは、一日に主婦がテレビを見る時間が平均4時間30分とのことであった。そのような余暇活用の実態から、主婦が果たして現在の生活に生きがいを感じているのか、もし、あまり感じていないとすればその原因は何か、また、女性が人間として生きがいを感じていくための生活形態はどのようなものであるか等を追究してみたいと思ったのである。

さらに、女子高校生は、今後ますます家事の簡素化が行なわれるなかで、未来の生活設計についてどのように考えているかについても調査したい。

なお、健全な家庭をきずき、家族一人一人の個性をいかし、それぞれが生きがいを感じていくためには、夫婦間の理解と協力が必要である。その意味で、夫の立場から妻にどのような生き方を望むか、ま

た、若い男子高校生は未来の女性像にどのようなものを求めているか等についても調査してみたい。そして、主婦、女子高校生、夫、男子高校生の四者の調査結果を比較、検討しながら、今後の女性の生活設計の未来像を求めてみたい。さらに、その未来像に合わせて、現在の高校女子教育はどうあらねばならないかを考究していきたい。

なお、本年度は主婦と女子高校生の実態調査のみ実施することにして、来年度は、夫と男子高校生についての調査を行ないたい。

II 調査内容

- (主婦対象) 1. 調査対象の生活実態(地域、年齢、学歴、夫の職業、家族構成、本人の生活形態)
 2. 生きがいについての意識
 3. 日頃やりたいことの有無
 4. 若い時の反省
 5. 育児、家事に対する考え方
 6. 今後の女性の望ましい生き方

- (女子高校生対象) 1. 母親の生活形態への希望
 2. 育児、家事に対する考え方
 3. 今後の女性の望ましい生き方
 4. 人生設計に対する意識

III 調査対象と分類

1. 主婦は新潟県の実家の主婦547人。その対象を年齢別、学歴別、生活形態別に分類し、集計した。分類別の人数は下表の通りである。

(表1) 年齢別

ア. 20～30才	53人	9.7%
イ. 31～40才	68	12.4
ウ. 41～50才	368	67.3
エ. 51才以上	56	10.2
オ. 無記入	2	0.4
計	547	100.0

(表2)

学歴別

ア. 小学校卒	129人	23.6%	323人
イ. 高等小学校卒	194	35.5	(59.1%)
ウ. 新制中学校卒	34	6.2	
エ. 旧制女学校卒	101	18.5	
オ. 新制高等学校卒	48	8.8	169人
カ. 旧制専門学校卒	11	2.0	(30.9%)
キ. 大学卒以上	9	1.6	
ク. その他	8	1.5	
ケ. 無記入	13	2.3	
計	547	100.0	

集計にあたっては、学歴別では就学年数の差がある小・高小卒と女学校卒以上の2グループにまとめて比較した。(表2)生活形態別では主婦の仕事の余暇に趣味や学習をしている表3のイ.と社会的活動をしているウ.と同性格

(表3) 生活形態別

ア. 家事や子供の世話に専念	72人	13.2%
イ. 主婦+趣味や学習	40	7.3
ウ. 主婦+社会的活動(PTA役員等)	12	2.2
エ. 主婦+自分の職業	166	30.3
オ. 主婦+内職やパートタイム	68	12.4
カ. 主婦+自家営業(農業含む)	178	32.5
キ. その他	7	1.3
ク. 無記入	4	0.8
計	547	100.0

的であるので合わせて同一グループとした。地域別では以上の分類に比較し、差が明瞭にでないと思い今回は省略した。(東大助教授、見田宗介氏の「現代日本人の生きがい」調査でも、都市と農村の差はあまり見られなかった。)

2. 主婦の年齢別と学歴別および生活形態別の関連。考察の資料として、下記の表4を作ったが、それ(表4)

主婦の年齢別と学歴別および生活形態別との関連

年齢	学歴別との関連						生活形態別との関連							
	ア. 小・高小卒	イ. 新中卒	ウ. 女学校卒以上	エ. 他	オ. 無答	計	ア. 主婦業のみ	イ. 主+趣+社会活動	ウ. 主+職+パート	エ. 主+内職+パート	オ. 主+目営	カ. 他	キ. 無答	計
ア. 20～30才	0 (26.4%)	14 (71.7%)	38 (1.9%)	1	0	53 (100)	19 (35.8%)	4 (7.5%)	13 (24.5%)	9 (17.0%)	8 (15.2%)	0	0	53 (100)
イ. 31～40才	26 (38.2%)	15 (22.1%)	23 (33.8%)	1	3	68 (100)	5 (7.4%)	9 (13.2%)	21 (30.9%)	8 (11.8%)	25 (35.7%)	0	0	68 (100)
ウ. 41～50才	250 (67.9%)	5 (1.4%)	100 (27.2%)	6	7	368 (100)	38 (10.3%)	30 (8.2%)	116 (31.5%)	44 (12.0%)	130 (35.3%)	7 (1.9%)	3 (0.8%)	368 (100)
エ. 51才以上	45 (80.4%)	0	8 (14.3%)	0	3	56 (100)	10 (17.9%)	7 (12.5%)	16 (28.6%)	7 (12.5%)	15 (26.8%)	0	1 (1.7%)	56 (100)
オ. 無記入	2	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	2
計	323	34	169	8	13	547	72	52	166	68	178	7	4	547

によると、小・高小卒は40代、51才以上に多く、女学校卒以上は20代に多い。また、生活形態別との関連では、主婦業のみが20代に多く、自家営業は30代、40代に多く、他は大差がない。

3. 女子高校生は新潟県の高校(12校)の3年生539人。学科別の人数は下表5の通りである。調査依頼校は新潟高校、新潟中央高校、新潟南高校、新潟商業高校、白根高校、長岡大手高校、与板高校、三条商業高校、六日町女子高校、高田北城高校、両津高校、沼垂高校の12校である。

学 科	人数	学 校 別
ア. 普通科(男女共学)	138人	A校45人・B校44・C校49
イ. " (男女別学)	120	D校39・E校46・F校35
ウ. 商業科	139	G校49・H校50・I校40
エ. 家政科	142	J校46・K校48・L校48
計	539	12校

調査依頼校は新潟高校、新潟中央高校、新潟南高校、新潟商業高校、白根高校、長岡大手高校、与板高校、三条商業高校、六日町女子高校、高田北城高校、両津高校、沼垂高校の12校である。

4. 女子高校生の学科別と母親の生活形態別との関連。下表6によると、普通科に主婦業のみが多く、男女共学の普通科に趣味、学習の時間をもつ主婦が多かった。自家営業は商業科、家政科に多く、他は大差ない。

(表6) 女子高校生の学科別と母親の生活形態別との関連

学 科	生活形態	ア. 主婦業のみ	イ. 主+趣・学習	ウ. 主+社会活動	エ. 主+職業	オ. 主+内職・パート	カ. 主+目営	キ. 他	ク. 無答	計
ア. 普通科(男女共学)		17人 (12.3%)	15 (10.9%)	3 (2.2%)	41 (29.7%)	18 (13.0%)	40 (29.0%)	4 (2.9%)	0	138 (100)
イ. " (男女別学)		18 (15.0%)	4 (3.3%)	3 (2.5%)	36 (30.0%)	18 (15.0%)	37 (30.8%)	4 (3.4%)	0	120 (100)
ウ. 商業科		3 (2.2%)	5 (3.6%)	2 (1.4%)	38 (27.3%)	20 (14.4%)	66 (47.5%)	4 (2.9%)	1	139 (100)
エ. 家政科		12 (8.5%)	7 (4.9%)	0	34 (23.9%)	20 (14.1%)	64 (45.1%)	5 (3.5%)	0	142 (100)
計		50	31	8	149	76	207	17	1	539

IV 調査方法

新潟県の高等学校12校(学校名は調査対象の項参照)を地域別を選び、各校の3年生の女子1クラス平均45人を女子高校生の対象とし、別の1クラスの母親を主婦の対象とした。なお、20代、30代の若い年齢層も加えるために、3幼稚園の母親も対象に加えた。3幼稚園は長岡大手高校附属幼稚園、柏崎常盤高校附属幼稚園、新潟市立沼垂幼稚園である。回収率は女子高校生100%、主婦96%であ

った。

V 調査時期 昭和47年10月

VI 調査の結果と考察

1 調査対象の生活実態

(表7) 地域

地 域	人数	%
ア. 都市	273	49.9
イ. 農村・漁村・山村	219	40.0
ウ. 無記入	55	10.1
計	547	100.0

(表9) 夫の職業

職 業	人数	%
ア. 農林漁業	128	23.4
イ. 公務員または会社員	239	43.7
ウ. 商業経営	53	9.7
エ. 工業経営	26	4.8
オ. その他	76	13.9
カ. 無記入	25	4.5
計	547	100.0

(表8) 家族構成

家 族	人数	%
ア. 夫あり	522	95.4
イ. 乳児あり	19	3.5
ウ. 幼児あり	64	11.7
エ. 小学生あり	81	14.8
オ. 中学生あり	175	32.0
カ. 高校生あり	494	90.3
キ. おじいさんあり	111	20.3
ク. おばあさんあり	186	34.0
ケ. その他がいる	43	7.9

地域別(表7)では,都市と農村が約半々である。家族構成,夫の職業は表8,9のようで,平均家族数は5.07人で全国平均3.72人(1970),県平均4.21人(1970)に比べて多いのは農村が半分近くで,かつ,老人家族が少ないためであろう。また,夫の職業は表9のようで,サラリーマンが約半数であった。

2 主婦の生きがいについての意識

(1) 毎日の生活に生きがいを感じているか

(表10) 生きがいの意識

程 度		ア. 大いに 感じている	イ. まあまあ	ウ. あまり感 じていない	エ. 全然感 じていない	オ. その他	カ. 無答
年 令 別	20～30才	20.8%	67.9	11.4	0	0	0
	31～40才	22.1	64.7	7.4	0	0	5.8
	41～50才	28.6	56.2	9.5	3.0	0	2.7
	51才以上	30.4	58.9	5.4	1.8	0	3.5
生 活 形 態 別	主婦業のみ	20.8	59.7	13.9	0	5.6	0
	主+趣・社	32.7	55.8	7.7	0	0	3.8
	家庭外勤務	30.1	55.4	10.2	1.8	0	2.5
	内職・パート	22.0	73.5	4.5	0	0	0
学 歴 別	自家営業	23.0	59.6	7.9	5.1	0	4.6
	小・高小卒	26.0	58.8	9.3	2.2	0	3.7
	中学校卒以上	25.4	65.1	7.7	1.8	0	0
平 均		25.8	59.9	9.0	2.2	0.7	2.4

表10によると,平均26%の人が生きがいを大いに感じ,あまり感じていない人はウとエの計11%程度である。年令別では若い人ほど感じていない。また,職業別では,趣味または社会活動をもっている主婦が一番多く生きがいを感じ,次に家庭外勤務となっている。最も少ないのは,主婦業だけの人である。学歴差はほとんどない。

(2) 毎日の生活のなかで、空虚感を感じることもあるか。

次に、生活のなかでの空虚感の感じ方を図1でみると、平均ではほとんどないが22%で表10の大きいに感じている数と大体一致しているが、時々感ずるが40%となっている。まあまあ生きがいを感じているが、毎日の生活のなかでは空虚感を時々感ずるということであろう。さらに、年齢別では、51才以上が48%と最も多い。職業別では、主婦業だけの人が、時々感ずるが一番多く47%で、次が自家営業である。それらに比し感じ方が少ないのは家庭外勤務、次が主婦+趣味、社会活動で、前表と同様な傾向がみえる。学歴別では女学校卒以上に空虚感を感じることが多いようにみえる。

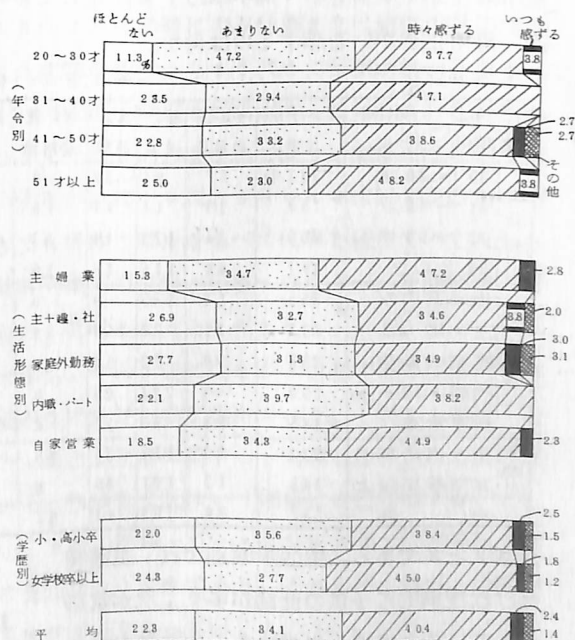
年齢が多くなれば時間的余裕もでて、何か心を集中するものがなければ空虚感を感じることが多くなることは容易に理解できる。それと同様なことが主婦業だけの生活にも言えることであろう。しかし、自家営業の忙しい主婦にとっても空しさを感じるのは、仕事の性質にも関係があるのではなかろうか。

(3) 空虚感を感じるのは何故か。(表11)

空虚感を感じる理由 (100人に対する反応出現率)

理 由		ア 子供の世 話や家事だけ で物足りない	イ. 自分の 個性がいかに せない	ウ. 忙しく て心の余裕 がない	エ. する ことが ない	オ. 社会活 動がなく さびしい	カ. 友達 がなくさ びしい	キ. その 他
分類別								
年 令 別	20 ～ 30 才	18.9	3.8	15.1	3.8	7.5	5.7	1.9
	31 ～ 40 才	2.9	1.5	2.94	1.5	2.9	5.9	1.5
	41 ～ 50 才	4.6	5.4	2.5.5	2.2	3.8	1.1	3.0
	51 才以上	7.1	7.1	3.2.1	1.8	5.4	0	1.8
生 活 形 態 別	主婦業のみ	16.7	13.9	16.7	6.9	5.6	5.6	1.4
	主 + 趣・社	7.7	9.6	11.5	5.8	9.6	1.9	3.8
	家庭外勤務	3.6	4.2	2.6.5	0.6	1.2	1.2	1.2
	内職・パート	8.8	2.9	2.3.5	0	1.5	0	8.8
	自家営業	2.2	7.3	3.0.9	0.6	5.6	2.8	1.1
学 歴 別	小・高小卒	4.6	5.0	2.8.2	1.9	1.2	0.3	2.2
	女学校卒以上	9.5	7.1	21.3	3.6	10.1	5.9	3.0
平 均		6.0	6.9	24.9	1.9	4.1	2.2	2.4

しくて心の余裕がないは、自家営業では理解できるが、51才以上の主婦でもその答が多いのは、とくにその年齢に自家営業、家庭外勤務が多いわけでもないの、時間の使い方、今一工夫を要するのではな



(図1) 空虚感の意識

いか。子供の世話や家事だけでは物足りないが、若い年代や主婦業のみに多く、また、自分の個性がいかせないも主婦業のみに多い。さらに、社会活動がなくてさびしいは、全体的に4%と少ないが、女学校卒以上が10%と小・高小卒の1%に比して多い。

(4) 最も生きがいを感じるのとは何か。

(表12)

一番生きがいを感じるもの

分類別	項目	ア. 子供の世話	イ. 夫の世話	ウ. 家事	エ. 趣味	オ. 社会活動	カ. 職業の仕事	キ. 学習・研究	ク. 遊び	ケ. その他	コ. 無答
年齢別	20～30才	30.2%	5.7	9.4	3.8	0	3.8	5.7	0	0.3	0
	31～40才	25.0	2.9	4.4	4.4	1.5	8.8	0	1.5	1.5	2.9
	41～50才	20.9	2.4	12.2	4.9	0.3	13.6	0.3	0.8	0.6	0
	51才以上	14.1	4.4	17.6	1.8	2.6	7.5	0	0	0	0
生活形態別	主婦業のみ	35.6	1.1	13.3	0	0	0	0	0	0	0
	主+趣・社	13.5	1.9	7.7	26.9	5.8	0	3.8	0	0	0
	家庭外勤務	23.5	3.0	7.2	1.2	0.6	21.1	0.6	1.2	0.6	0
	内職・パート	25.0	5.9	22.1	2.9	0	4.4	1.5	0	0	0
学歴別	小・高小卒	23.1	4.3	11.7	3.1	0.9	10.8	0.3	0.6	1.2	0.3
	女学校卒以上	18.5	1.2	10.7	8.9	0	10.9	0.6	1.2	0	0
平均		23.2	3.4	10.9	4.3	0.7	11.8	0.7	0.9	0.9	0.3

表12で平均をみ

ると、一位は子供の世話で23%，次が職業としての仕事12%，家事が11%，趣味、夫の世話が4～3%程度で、社会活動、学習等はほとんどない。上位の4つを生活形態別、年齢別に比較したの

が図2と3である。生活形態別では、主婦業だけは圧倒的に子供の世話が多く、次が家事である。それにくらべ趣味をもつ主婦が趣味を第一にあげた人が27%で、家事と答えた人は8%に過ぎない。また、家庭外勤務は子供と同程度に職業としての仕事をあげており、家事は7%であった。内職・パートは子供の世話、家事が多く、職業としての仕事はわずか4%であった。自家営業は子供の世話に続いて職業としての仕事をあげていたが、家庭外勤務のそれより少なかった。

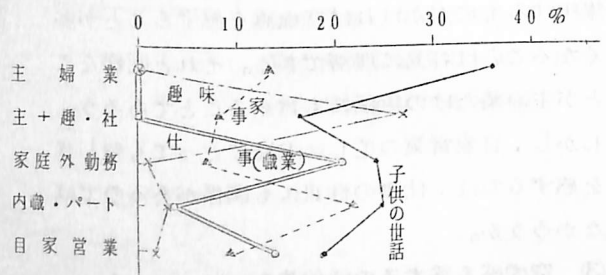
年齢別では、子供の世話は年齢が多くなる程少なくなり、それにつれて家事が多くなり、職業に一番生きがいを見出しているのは40代であった。

次に、家事を生きがいと感ずる人にどの面(図3) 一番生きがいを感じるもの(年齢別)が問うた結果が表13である。

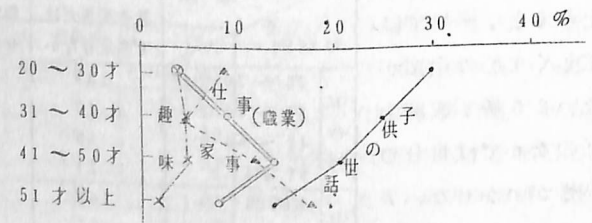
(表13)

家事において一番生きがいを感じるもの

項目	イ. 家族が喜ぶ食事やおやつを作る	ウ. 家族が住み心地よいように掃除・整頓する	エ. 家族が楽しい環境を与えるように室内を飾る	オ. その他
平均	4.0%	1.4	5.1	0.2



(図2) 一番生きがいを感じるもの(生活形態別)



(図3) 一番生きがいを感じるもの(年齢別)

婦人問題研究家、藤井治枝氏は、「女性の生きがいのベスト③は①子ども②趣味③仕事で家事そのものに生きがいを見出す主婦は、専業でも1割ちょっと、共稼ぎや家業従事ではほとんどない³⁾」といっておられる。また、見田宗介氏は、「女性は生きがいを18~19才の時にのみ仕事または勉強に見出すが第一で、20才を過ぎると家庭が第一となる。そして20代の後半から40代まで子供が第一となり、家庭が第二となっている。さらに、NHKの調査(1968)にも同様な傾向がみえている⁴⁾」と。しかし、家庭の具体的な内容には、家族と一緒にいるというようなものが含まれており、家事だけという意味ではない。引き続いて見田氏は、「女性の仕事への生きがいは10代と30~40代に2つの山があり、後者は13%程度で、それは結婚して子供ができて男性と肩をならべて仕事を続けていく人たちの職業人としての誇りを含んでいる。しかし、自営業者や農業の主婦が仕事への生きがいを感じているのは8~6%弱である。社会活動は未婚が4%であるが、既婚となると1%となる。」と⁵⁾。

若い20代が新しい生命の誕生に心の底から喜びを感じ、その世話に生きがいを感じるのは当然であろうが、それでもなお、生活にあきたらず、社会活動のないさびしさを訴えていた。(表11参照)そして、51才以上になり子供に手がかからなくなると、また、家事に集中し、家事を生きがいと言いながらも、忙しく心の余裕がないとむなしさを訴えている。梅棹忠夫氏は、「家事は自己増殖する。」と言っておられるが、生活設計についての工夫がほしい。また、内職・パートは自家営業では経済面のプラスは考えられるが、仕事に対する生きがいはあまり見出せないようである。それらにくらべ、趣味や社会活動をもつ主婦、職業をもつ主婦は子供以外にも生きがいをもっている人が多い。

次に、女性の真の生きがいとは何か、いろいろ論じられているが、そのいくつかを記してみたい。11月のNHKテレビ、「こんにちば奥さん」で女性の生きがいととりあげられ、20人余の家事専業と仕事をもつ主婦で3日間にわたり話し合いがなされた。家事専業の主婦が社会の種々な情報に常に関心を持ち、学習するとともに、一面では食品公害から家族を守るために手作りの衣服、食物を家族に作ってあげている。そのような生活に生きがいを見出している話がだされていたが、さらに、それらの公害をなくしよう、積極的な立ちあがり、社会で活躍している主婦の発言が一層自信に満ちていた。また、自分の職業を持ち、社会の中での地位を確保している主婦の姿も頼もしく見えていた。そして、女性にとっても本当の生きがいは、社会と直結した仕事をもってはじめて感ずるのではないかという結論がだされていた。また、瀬戸内晴美氏は、「人間は本当に自分のやりたいことをやって、それが自分のため主人のため子供のためとかでなく、社会に少しでも役立っているという自覚があったときに、なんだか生きていてよかったと思うのではないのでしょうか。」⁶⁾といっておられる。さらに、ボーヴォワール氏は、「家庭の個人的な生活のなかにとじこめられた、相対的存在としての地位に限定されている女性の状態を、自分の仕事や職業、社会的・政治的行動のなかで自己を実現する女性にくらべて劣るものであると考える。女性が単に妻であり、母であるだけならば決して自己を完全に実現することができず、とくに40才以後の後半期において深刻な不幸感として表われてくる。」⁷⁾といっておられる。また、見田宗介氏は、「趣味とかその他の余暇活動が中心的な生きがいとなるのは、それらが慢然と楽しまれているときだけでなく、むしろ、ある意味で『仕事』に近い姿勢をもって立ち向かわれている時が多い。すなわち、主體的、創造的な自己の実現と他者との交流が主要な活動内容となる。」⁸⁾といっておられる。

私ども家庭婦人は子供にのみ生きがいを求めるだけでなく、さらに、一方では以上のような内容をもつまでに深められた趣味(他の余暇活動も含む)、また、職業あるいは社会活動のような社会と直結した仕事にも生きがいを見つけていきたいものである。

次にやりたい意志をもちながらそれを阻害しているものについて調査してみた。

3 主婦の日頃やりたいことの有無

(1) 日頃やりたいと思っていることがあるか。(2) 一番やりたいことは何か。

(表14)

日頃やりたいことの有無

表14で平

項目 分類		ア. ある	一番やりたいこと						イ. ない	ウ. その他	
			あ. 趣味 を習う	い. 社会 活動する	う. 学習 ・研究	え. 就職 ・パート	お. 内職 ・パート	か. 遊びを おぼえる			き. そ の他
年齢別	20～30才	75.5	50.9	0	7.5	5.7	3.8	3.8	3.8	22.6	1.9
	31～40才	48.5	29.4	2.9	10.3	2.9	1.5	1.5	0	50.0	1.5
	41～50才	38.6	22.7	3.0	4.7	2.2	3.3	2.7	0	51.6	9.8
	51才以上	33.9	10.7	7.1	1.8	1.8	3.6	1.8	7.1	55.4	10.7
生活形態別	主婦業のみ	56.9	36.1	2.8	8.3	0	2.8	1.4	5.5	41.7	1.4
	主+趣・社	51.9	32.7	1.9	11.5	3.8	1.9	3.8	7.5	46.2	1.9
	家庭外勤務	46.4	34.9	1.2	5.4	0	1.2	1.2	0	48.8	4.8
	内職・パート	52.9	33.7	4.4	4.4	5.9	1.5	1.5	1.5	44.1	3.0
	自家営業	38.8	23.6	2.8	3.4	1.7	3.9	3.4	0	48.3	12.9
学歴別	小・高小卒	37.8	23.2	2.5	3.1	0.6	2.2	1.9	4.3	55.4	7.1
	女学校卒以上	64.5	44.3	2.4	10.0	2.4	3.6	1.8	0	33.7	1.8
平均		56.4	31.1	2.4	5.6	1.7	2.4	2.2	2.2	38.6	5.0

均をみると、あるが56%と半数以上である。分類別では20代が76%と非常に意欲的で、年齢が多くなるほど満たされているのか、意欲がなくな

るのか少ない。さらに、生活形態別では主婦業のみが57%、内職・パートが53%、主婦+趣味・社会活動が52%で自家営業、家庭外勤務は時間的に無理か、一応満たされているのか39%、46%といくらか少ない。学歴別では、女学校卒以上が65%と小・高小卒の38%に比較して差がある。

次に、一番やりたいことを同表14でみると平均では趣味を習いたい31%、学習、研究6%、社会活動、内職・パートが各2%程度で就職希望はほとんどない。とくに、趣味を習いたいのは20代、女学校卒以上、主婦業のみに多い。学校卒業後結婚までの間にかなりけいこごとに通っているといわれるが、それとて一部だけで、当センターの調査(昭45)によると料理学校37%、和洋裁学校43%程度であった。学習・研究の希望は30代と趣味をもつ主婦がそれを望み、さらに、女学校卒以上の主婦にかなりの数字があがっていた。社会活動については、51才以上、内職・パートの主婦にいくらかその希望があったが、全体的に少ない。さらに就職の希望となると、ますます少なく、一度家庭に入ると社会にでることはかなりおっくうになる傾向である。

(2) 何故やれないか。

表15でその理由をみると、時間の不足が第一にあげられている。家庭内の仕事は一日継続的で確実にまとまった余暇がとりにくいこともあろうが、それとて目標を掲げて計画的に家事を処理することにより時間が生みだせるのではなからうか。夫や子供が反対という理由もいくらかみえていますが、それらより自己の方にやれない原因がありそうである。種々な理由があげられているが、言いわけにすぎない

のではなからうか。結局は意欲を行動にうつす実行力の問題であろう。

(表15)

やれない理由

(100人に対する反応出現率)

理由 やりたいこと	ア. 場所がない	イ. 習う人がいない	ウ. 経費がかかる	エ. 夫が反対	オ. 子供が反対	カ. 時間がない	キ. 一緒にする友がいらない	ク. おつこうである	ケ. 自信がない	コ. 仕事がない	サ. 特殊技能がない	シ. その他
ア. 趣味を習う	2.1	2.1	6.9	1.1	0.2	2.1.9	3.0	2.1	1.1	0	0.7	0.9
イ. 社会活動する	0.4	0	0.6	0.4	1.3	0.2	0.4	0.2	0	0.4	0.2	0.2
ウ. 学習・研究する	0.7	0.7	0.9	0.6	0	2.6	0.4	0.6	0.4	0	0	0.4
エ. 就職する	0	0	0	0.2	0	0.4	0	0	0.2	0.4	0.4	0
オ. 内職・パートする	0	0	0	0.2	0.2	0.7	0.2	0	0	1.3	0.4	0.2
カ. 遊びをおぼえる	0.4	0	0	0.2	0	1.1	0	0	0	0	0	0

4 主婦の若い時の反省

(1) 現在の生活をより充実するためにしておけばよかったと思うことがあるか。(2) どんなことか。

表16でその反省の結

(表16)

若いときの反省

果をみると、若い時の過ごし方に悔いをもっている主婦が平均56%いる。多いものは20代の68%, 内職・パートの72%, 主婦業のみの64%, 女学校卒以上の66%等である。その内容は、特殊技能の希望が19%, 習いごと、職業への反省が16%, 進学希望が14%であった。その具

項目 分類	ア. あり	内 容						イ. ない	ウ. その他
		あ. 生涯見通しの上で職業を選ぶ	い. 進学する	う. 特殊技能を習得する	え. 習いごとをする	お. 個性をのばす	か. その他		
年齢別									
20～30才	67.9	13.2	15.1	30.2	30.2	9.4	3.8	32.1	0
31～40才	58.8	17.6	14.7	16.2	11.8	5.9	1.5	38.2	2.9
41～50才	56.3	16.8	13.0	16.6	14.4	4.3	2.7	38.0	5.7
51才以上	39.1	12.5	12.5	21.4	16.1	1.8	0	53.6	7.3
生活形態別									
主婦業のみ	63.9	19.4	11.1	26.4	5.6	4.2	1.4	36.1	0
主+趣+社	55.8	9.6	13.5	36.5	5.8	7.7	1.9	40.4	3.8
家庭外勤務	54.8	13.9	15.7	14.5	13.9	1.8	1.8	40.4	4.8
内職・パート	72.1	20.6	19.1	19.1	20.6	7.4	4.4	26.5	1.4
自家営業	48.3	15.7	10.7	14.0	14.6	5.6	1.7	41.6	10.1
学歴別									
小・高小卒	51.4	16.4	13.3	14.6	17.0	3.1	1.9	42.1	6.5
女学校卒以上	66.3	13.6	10.7	27.2	13.0	8.3	4.1	32.0	1.7
平均	56.4	15.7	13.7	18.7	15.9	4.9	2.4	38.6	5.0

体的なものとして特殊技能では、看護婦、タイプライター、簿記、経理、栄養士、教師等があり、習いごとでは和裁、洋裁、ピアノ、茶道、花道があり、その教授、師範程度の高度な習熟を希望していた。そして、20代は特殊技能、習いごとの希望が高く、趣味をもつ主婦は特殊技能を、内職・パートは職業を、また、女学校卒以上は特殊技能の習得についての希望が高かった。内職・パートが仕事にあまり生きがいを感じられないとすれば、生涯を見とおした上で職業を選べばよかったとの反省をもつ気持も理解できる。それらに比し、自家営業、家庭外勤務、趣味をもつ主婦は、現在の生活をまあまあと考えているからであろうが、悔いが少ないようにみえた。しかし、趣味をもつ主婦が、特殊技能の習得希望が他に比し多く、37%もあることは、単なるけいごとをより高度な資格習得の程度にまで高めた方がもっと充実した生活を過ごせたであろうという願いと受けとめられる。

5 女子高校生の母親の生活形態への希望

(1) 母親の生活についての希望があるか。(2) どんなことを希望するか。

(表17)

母親の生活への希望の有無

表17によると、

学 科	ア. ある	希 望 の 内 容					イ. ない	ウ. その他
		あ. 趣味や学 習の時間をも ってほしい	い. 社会的 活動をして ほしい	う. 職業 をもつて ほしい	え. 家事や子 供の世話をし てほしい	お. その他		
普通科 男女共学	40.6%	25.4	2.2	1.4	7.2	6.5	59.4	0
普通科 男女別学	46.7	37.5	0.8	1.7	5.0	8.3	53.3	0
商業科	49.5	28.1	1.4	1.4	16.5	5.7	49.6	0.8
家政科	50.7	30.3	1.4	0	14.1	4.9	49.3	0
平 均	46.9	30.1	1.5	1.1	10.9	6.3	52.9	0.2

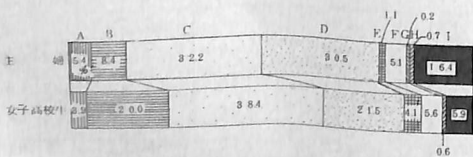
平均47%の生徒が
母親の生活に対する
希望をもっていた。

その希望内容につ
いては、趣味や学習の
時間をもつが30%
と一番多く、家事や

子供の世話を十分にが11%、社会活動や職業への希望は少ない。かえってその他には、母親自身の体を休めてほしい等もあった。主婦は家庭にとどまりながらも、趣味等の自分の時間をもつてほしいとの願望が強いようである。学科による差はいくらかあるが、それは母親の職業の差(表6参照)からのようで、男女別学の普通科が趣味や学習の時間をもつてほしいが多いのは、主婦業のみが多く、商業科や家政科に家事や子供の世話をしてほしいが多いのは、自家営業が多いためのようである。

6 主婦と女子高校生の育児・家事に対する考え方

(1) 経済的にやや無理をすれば生活していけるとすれば、育児についてどのようにしたいか。



(図4) 育児に対する考え方

- A 乳児の時だけ家庭にいて世話する
B 幼児まで
C 小学生まで
D 成人するまで
E 保育施設にあずけ職業をもつ
F 祖母にあずけ
G 手伝い、隣人にあずけ
H 共同保育する
I その他

図4で主婦と女子高校生の平均を比較すると同傾向である。小学生まで家庭にいて世話したいが一番多く、主婦32%、女子高校生38%である。次が成人までで主婦30%、女子高校生22%である。祖母にみてもらって職業をもちたいが5%程度、保育施設にあずけるはごく少ない。子供の世話を生きがいの第一と考えている主婦にとって家庭にとどまって子供の世話をしたい気持ちもわかるが、成人するまでが主婦の $\frac{1}{3}$ もいることは問題ではなからうか。女子高校生でも20%いる。その考え方が教育ママや過保護に連がるのではなからうか。イスラエルのキブツの機能の一つとしての共同保育の考え方が反省期にきているとも聞いているが、子供を共同保育したい

という考え方はほとんどなかった。

両者を分類別に表18でみると、年齢別では著しい差はみられなく、20代が保育施設にあずけ職業をもつことがやや多い程度であった。職業別では成人するまで家庭にいて世話をするが、内職・パート、主婦業のみ、趣味をもつ主婦等いずれもそれぞれの中で一番多く50~40%をしめ、自家営業は数字

は前者に比し少ないがその中では一番多かった。女学校卒以上も成人までが一番多く48%であった。家庭外勤務だけは、小学生の頃までが一番 (表18) 育児に対する考え方

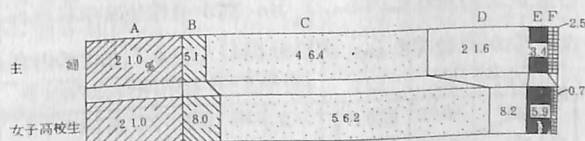
多く、成人までが21%程度であった。そして、祖母にあずけて職業をもつが家庭外勤務、自家営業に7~8%程度みえている。

次に、高校生の学科別差はあまりない。いずれも小学生頃まで家庭にいて世話をしやりたが一番多いが、成人までが家政科以外いずれも20%以上ある。家政科だけが13%程度で子供に対する正しい躾け方をわきまえているようにみえる。さらに、保育施設にあずけるは男女別学の普通科にやや多く、祖母にあずけるが家政科にやや多い。

分類	項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I
主 婦	20~30才	5.7%	5.7	39.6	34.0	5.7	1.9	0	0	7.5
	31~40才	4.4	7.4	25.0	23.5	0	8.8	1.5	2.9	26.5
	41~50才	5.4	7.6	32.6	32.9	0.8	4.6	0	1.6	14.5
	51才以上	7.1	14.3	28.6	35.7	0	5.4	1.8	0	7.1
婦 女	主婦業のみ	6.9	8.3	25.0	44.4	1.4	1.4	0	0	12.6
	主+趣・社	1.9	3.8	36.5	40.4	0	0	1.9	0	15.5
	家庭外勤務	6.0	9.0	46.4	20.5	1.2	7.8	0	1.8	7.3
	内職・パート	3.0	5.8	29.4	50.0	3.0	0	3.0	0	5.8
	自家営業	6.7	8.4	27.0	33.1	1.1	7.3	0.6	0	15.7
学 歴 別	小・高小卒	6.2	8.4	35.3	27.2	0.6	6.8	0	1.4	14.3
	女学校卒以上	5.3	15.4	19.5	47.9	0.6	1.2	1.2	1.2	0.7
高 校 生	男女共学	5.1	21.7	28.3	21.7	5.1	5.1	0.7	0	12.3
	普通科	4.2	16.7	35.7	27.5	4.2	5.0	0.8	0	5.8
	男女別学	3.6	20.1	40.3	24.5	3.6	5.0	0	0	3.0
	商業科	2.8	21.1	48.6	13.4	3.5	7.0	0.7	0	2.9

(2) 家事は誰がすべきと思いますか。

図5で平均をみると、主婦、高校生ともに家族が分担すべきが一番多い。しかし、主婦一人ですべきが、主婦、高校生ともに21%、女の子のみに手伝わすべきが、女子高校生には少ないが、主婦には22%もあることは、家事は女性の役割であるという従来の考え方が根強く残っているようである。大阪市大竹中恵美子氏は、「家事労働を家事作業と家



(図5) 家事に対する考え方

- A 主婦が一人ですべき B 夫も協力すべき
C 家族が分担すべき D 女の子のみ手伝わすべき
E その他 F 無答

(表19) 家事に対する考え方

分類	項目	A	B	C	D	E	F
主 婦	20~30才	4.3%	9.4	34.0	5.7	5.7	1.9
	31~40才	17.6	4.4	51.5	20.6	1.5	4.4
	41~50才	19.6	5.4	50.0	19.0	3.8	2.2
	51才以上	17.9	5.4	42.9	32.1	0	1.7
婦 女	主婦業のみ	35.9	3.5	31.7	28.9	0	0
	主+趣・社	34.6	3.8	26.9	25.0	7.7	2.0
	家庭外勤務	13.9	8.4	57.2	16.3	2.4	1.8
	内職・パート	29.4	8.8	48.5	11.8	0	0
	自家営業	15.7	2.8	50.0	24.2	4.5	2.8
学 歴 別	小・高小卒	15.8	5.0	50.5	22.3	2.2	4.2
	女学校卒以上	30.8	7.1	44.4	13.0	4.7	0
高 校 生	男女共学	2.5	8.0	55.1	6.5	5.8	2.1
	普通科	2.6	10.8	52.5	6.7	3.3	0
	男女別学	2.3	5.8	51.8	9.4	9.4	0
	商業科	12.0	7.7	64.8	9.9	4.9	0.7

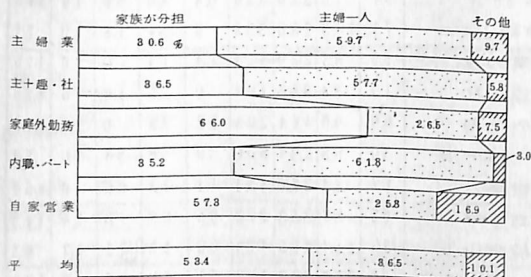
次を表19で分類別にみると、20代は子供も小さく自分の実感からか主婦一人で圧倒的に多く、女の子のみに手伝わすべきという性差の考え方は少ない。また、生活形態別では主婦業のみ、趣味をもつ主婦が主婦一人で、女の子のみが多く、家庭外勤務、自家営業が家族協力が多。学歴別では女学校卒以上に主婦一人でとの数が多いが、家庭の主婦が多いためであろうか。女子高校

生を学科別でみると家政科が家族分担が65%と他の学科との差をつけているが、とくに母親の職業に差はないので、家事というものを新しい感覚でみているからであろう。

(3) 家事の分担の実態について

(表20) 家事の手伝い状態

図6によると



(図6) 家事の分担状態

学科	ア. 手伝う (A. Help)	イ. 手伝わない (I. Don't help)	ウ. 無答 (U. No answer)
男女共学 (Co-ed)	87.7%	10.9	1.4
普通科 (General)	86.7	12.5	0.8
商業科 (Commercial)	87.8	10.8	1.4
家政科 (Home Economics)	88.0	12.0	0
平均 (Average)	87.6	11.5	0.9

平均では家族で分担が53%, 主婦一人が37%で主婦業だけ、趣味をもつ主婦、内職・パートの主婦が家族分担が30~35%で、家庭外勤務、自家営業が66%, 57%と多い。藤井治枝氏は、「夫が家事を手伝う平均頻度をグループ別

にだすと、①共稼グループ②家業従事グループ③主婦専業グループと主婦が働いている割合に比例して、夫の家事協力が増加している。こうしてとなく仕事一筋、家事にノータッチを看板にしていたわが国の男性も、主婦の職場進出という現実の前に次第に態度の変更を迫られている。」と。女子高校生は学科別の差はなく88%の人が手伝っているが、100%でないのが残念である。次に分担している人とその内容を表21でみると、女の子の欄は母親がみた結果

(表21) 家事の協力状態とその内容

項目	協力の割合 (%)	ア. 食事準備 (A. Meal prep)	イ. 食事の後始末 (I. Post-meal cleanup)	ウ. 洗濯 (U. Laundry)	エ. 掃除 (E. Cleaning)	オ. 床のあげさげ (O. Bed making)	カ. 食料品の買物 (Ca. Grocery shopping)	キ. 子供の世話 (Ki. Child care)
分類								
あ. 夫 (A. Husband)	25.1%	2.6	2.2	1.5	6.7	15.4	5.4	4.1
い. 男の子 (I. Boy)	12.0	1.1	2.8	1.3	5.1	7.5	3.9	0.6
う. 女の子 (U. Girl)	45.7	34.1	37.1	32.0	30.5	20.6	26.2	2.6
え. 女子高校生 (E. High school girl)	87.6	59.0	64.4	47.5	57.7	38.0	33.4	3.7

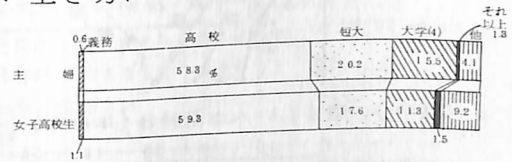
で、女子高校生は自分の意識の結果であり、また、対象も異なるので数字に差があるが、いずれにしても男女の性差が明瞭に

表われている。家族が分担すべきとの意識をもっているが、実際にはなかなか協力してもらえない実態のようである。とくに、女子高校生以外は、食事の後始末、掃除、床のあげさげ(ベットの使用10%程度)等の分担の数字があまりに少ない。それにつき、藤井治枝氏は、「夫が手伝う家事は①子供の相手・育児②大工仕事・庭の手入れ③留守番④掃除・床のあげさげ⑤食料品の買物等である。①-③は家庭内のはほぼ男向きの仕事④以下になって始めて家事らしくなる。さらに、家事の中心分野(食事の準備、皿洗い、洗たく)ではぐっと少ない。英国の中産階級の夫の4割は皿洗いを当然としており、かえって進んで実施するときぐが、わが国のように男女の役割構造が長い間はつきり分かれていた所では、家事は女の分担で男は助けてやるのだという意識が強く家事協力のブレーキになっているようだ。」と。終戦後、小学校で男女共修の形で家庭科を実施し、家族間の協力について学習している。しかし、主婦が一人ですべき、女の子のみに手伝わすべきという考え方が母親の80%近くもある限りこの様な実態となるであろう。家庭は個々の生活を尊重しながら協力体制をとるべきとの考え方を男女に徹底させるためにも男女共修の家庭科の検討は必要である。

7 主婦と女子高校生の今後の女性の望ましい生き方についての意識

(1) これからの女性は何のくらいの学歴がほしいか。

図7で主婦と女子高校生の平均を比較すると、大差はないが、主婦の方が高学歴を望む声はやや大きい。主婦は自己の反省からであろうが、高校生は現実の問題として種々な障壁に直面しているから(表22)



(図7) 望ましい学歴(平均)

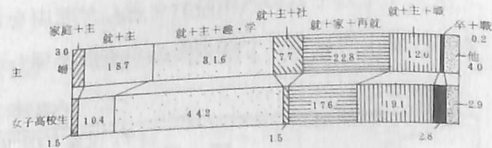
望ましい学歴(分類別)

であろうか。次に、分類別を表22でみると、若くなるほど高学歴を望み、生活形態別では趣味をもつ主婦が4年制の大学を多く希望し、自家営業、家庭外勤務は高校程度が多い。前者は後者に比し女学校卒以上が多いためであろうか。学歴別では差が明瞭に表われ、女学校卒以上に短大希望が2倍、4年制大学希望が4倍と大きな違いがでていた。また、女子高校生は普通科の男女共学が4年制大学希望が多いが、大学進学希望者がその学校を選ぶからであろう。

学校分類		ア.義務教育	イ.高校	ウ.短大	エ.4年制大学	オ.大学以上	カ.その他	キ.無答
主婦	20~30才	0%	41.5	28.3	22.6	1.9	0	5.7
	31~40才	2.9	53.0	22.1	19.1	1.5	0	1.4
	41~50才	0.3	59.8	17.9	14.4	1.6	2.4	3.6
	51才以上	0	66.1	23.2	7.1	0	0	3.6
生活形態別	主婦業のみ	0	55.5	25.0	15.3	1.4	2.8	0
	主+趣・社	0	42.3	23.1	30.8	0	3.8	0
	家庭外勤務	0.6	60.8	16.3	16.9	1.8	1.8	1.8
	内職・パート	0	50.0	26.5	17.6	1.5	1.5	2.9
学歴別	自家営業	1.1	64.1	18.5	9.0	1.1	0.6	5.6
	小・高小卒	0.6	70.6	14.2	7.7	0.6	2.2	4.1
	女学校卒以上	0.6	34.3	30.8	29.6	3.0	1.2	0.5
	男女共学	2.2	41.3	11.6	26.1	3.6	12.3	2.9
高校科別	普通科	1.7	62.5	18.3	8.3	0.8	8.4	0
	男女別学	0	66.9	18.7	7.2	1.4	4.3	1.5
	商業科	0.7	66.9	21.8	3.5	0	6.3	0.8
	家政科							

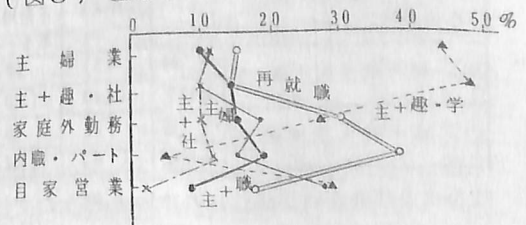
(2) これからの女性はどうような人生設計をしたら充実感が得られると思うか。

図8で主婦と女子高校生の平均を比較すると、いずれも卒業後就職し家庭に入って主婦専業となり、余暇を趣味、学習に使いたいとの希望が多かった。女子高校生は第二が共働き、ついで再就職で、主婦は再就職、共働きの順となっている。社会活動の希望はいずれも少ないが、とくに女子高校生に少ない。今後の女性のあり方として検討の必要があろう。



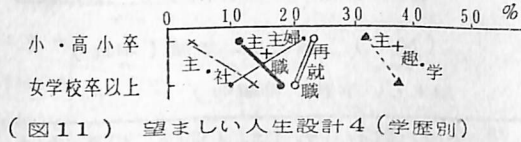
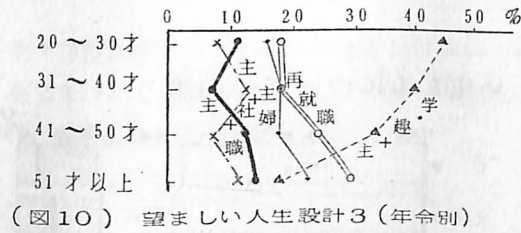
(図8) 望ましい人生設計1(平均)

次に、図9で生活形態別の差をみると、家庭外勤務の主婦が自分の現在の生活を否定して再就職や趣味、学習をもつ生活を希望していることは注目される。両立の厳しさの反省からであろうか。



(図9) 望ましい人生設計2(生活形態別)

また、次頁の図10で年令別の差をみると、20代は趣味をもつ主婦を望んでいるが、年令が高くなるとともにその希望が減少し、再就職、共働きの希望が多くなっている。余暇がでてくるとともに趣味をもつ生活に物足りなさを感じるためであろうか。さ



(表23)

望ましい人生設計

(100人に対する反応出現率)

人生設計		ア. 卒+家庭+主婦のみ	イ. 卒+就+主婦のみ	ウ. 卒+就+主婦+主+学	エ. 卒+就+主+社会活動	オ. 卒+就+主+再就職	カ. 卒+就+主+職業	キ. 卒+職業	ク. 他	ケ. 無
主 婦	20~30才	0%	13.2	45.3	7.5	17.0	11.3	0	1.9	3.8
	31~40才	5.9	17.6	39.7	11.8	17.6	7.4	0	0	0
	41~50才	3	17.9	33.4	6.5	23.6	12.0	0.3	1.1	2.2
	51才以上	1.8	23.2	17.9	10.7	28.6	14.3	1.8	1.7	0
	主婦業のみ	4.2	11.1	44.4	11.1	15.3	9.7	0	1.4	2.8
	主+主+学	3.8	9.6	48.1	9.6	13.5	13.5	0	0	1.9
	家庭外勤務	1.8	17.5	26.5	9.6	30.1	14.5	0	0	0
	内職・パート	4.4	14.8	4.5	11.8	37.8	19.2	2.9	0	4.6
高 校 生	自家営業	2.8	28.1	28.7	3.4	17.4	8.4	0	0	0
	小・高小卒	4.3	21.7	31.0	4.0	23.2	11.1	0.3	1.5	2.7
	女学校卒以上	2.4	10.1	37.3	14.2	19.8	12.6	0.6	0.6	2.4
	男女共学	0.7	7.2	34.8	2.9	17.4	23.2	5.8	6.5	1.5
	普通科	0.8	9.2	50.0	1.7	15.8	18.3	2.5	1.7	0.8
	男女別学	2.2	12.9	43.2	1.4	15.1	21.6	1.4	2.2	0
	商業科	2.1	12.0	49.3	0	21.8	13.4	1.4	0	0
	家政科									

次に、それぞれの人生設計を選んだ理由をあげてもらったが、そのうちの2コースの理由のみ次表24に示した。趣味や学習をもつ主婦を望む理由は、子供は母親の手で育てたい、しかし、家庭だけで

(表24)

人生設計を選んだ理由

(100人に対する反応出現率)

理 由		ア. 女性 は家庭専 念がよい	イ. 家庭 だけで生 きがいがある	ウ. 結婚 前の就職 経験はよ い	エ. 職業 と家庭の 両立はむ りである	オ. 子供 は母親が 家庭にい て育てる	カ. 家庭 だけでは 生きがい がない	キ. 自分 の仕事が ある方が よい	ク. 経済 力をもつ た方がよ い	ケ. その 他
あ. 卒+就+主+主+学	主婦	4.3	3.7	19.7	4.5	13.7	3.4	9.0	4.3	3.4
	高校生	(5.4)	(6.3)	(28.8)	(5.2)	(22.6)	(3.5)	(12.2)	(2.6)	(4.6)
い. 卒+就+主+職業	主婦	0	0	1.5	0.2	0.4	2.2	8.4	4.5	2.0
	高校生	(0)	(0.2)	(4.3)	(0.2)	(2.8)	(3.8)	(17.1)	(5.6)	(1.3)

はあまり生きがいを感じられないと思うので仕事は持ちたい。が、家庭と職業との両立は無理である。それで仕事を趣味や学習に求めていると言えよう。高校生も同様な意見であった。次に、家庭と職業の両立を希望する理由は、家庭だけでは生きがいがない、仕事や経済力をもちたいとのことであった。

次に、職業をもつ主婦も共働きの生活を望む数が少なかったため、職業をやめたいか聞いてみた。

(3) あなたは経済的にややゆとりがある生活ができるようになったら職業をやめますか。何故ですか。

(表25)

事 項	%
やめる	42.1
やめない	57.2
その他	0.7

(表26)

職業をやめたくない理由 (100人に対する反応出現率)							
理 由	ア. 家事のみでは物足りない	イ. 女性も仕事をもつ方がよい	ウ. 仕事に生きがいがある	エ. 姑とはなれている方がうまくいく	オ. ゆとりのある生活がよい	カ. 家事や育児をする人がいる	キ. 自分も経済力をもちたい
%	9.0	20.5	13.9	2.4	15.7	6.0	13.3

(表27)

職業をやめたい理由 (100人に対する反応出現率)							
理 由	ア. 体が疲れる	イ. 子供の世話不十分	ウ. 夫の世話不十分	エ. 両親の世話不十分	オ. 夫が職業に反対	カ. 子供が職業に反対	キ. 職業が中途半ば
%	21.1	10.8	6.6	1.2	1.2	1.2	4.2

表25によると、42%と半数以下であるがやめたい人がある。その理由は体が疲れる21%、家事不十分16%、子供の世話不十分11%で、疲労と家事への不満足の理由が多く、職業の不十分への反省、家族反対等の理由は少ない。また、一方やめたくない理由は、女性も仕事をもちたい21%、よりゆとりがほしい16%、仕事への生きがい14%、自分も経済力をもちたい13%、家事のみでは物足りない9%と仕事に強い意欲をもっていた。しかし、半分近くがやめたいという程の両立の厳しさが、今後の女性に対して家庭で趣味をもつ主婦がよいと希望するのであろう。しかし、今後、週休2日制、育児休暇等労働条件の好転が期待される折から、今後の女性は大きな視野から悔いのない人生設計を選んでもらいたいものである。福岡教育大学、高木葉子氏は女子高校生とその母親の職業意欲についての調査から「女子高校生の職業意欲が職業継続という点でまだまだ消極的な状況であろうことは予想していたが、家庭中心志向の強さは予期以上であった。社会的変化のなかでこうした姿勢が将来の女性の生き方にとって、また、社会全体にとってプラスになるとはとても考えられない。今後の学校教育においても、小中高一貫した女子の労働観の育成や職業問題に対する指導理念の確立が必要である。」¹²⁾とい

8 女子高校生の人生設計についての意識

(1) 職業や進学をきめるとき、人生設計について考えたか。(2) どの程度考えたか。

(表28)

人生設計を考えた程度

学 科	程 度	ア. よく考えた	イ. 一応考えた	考 え た 範 囲				ウ. あまり考えなかった	エ. 全然考えなかった	オ. 無答
				あ. 結婚まで	い. 子供が生まれるまで	う. 子供が学校にあがるまで	え. 一生見とおす			
男女共学	19.6%	60.1	47.8	10.9	2.2	18.8	0	14.5	1.4	4.4
普通科										
男女別学	13.3	65.8	47.5	11.7	4.2	15.0	0.8	17.5	0.8	2.6
商業科	20.9	62.7	52.5	10.1	5.0	15.1	0.7	14.4	1.4	0.6
家政科	16.2	62.7	38.0	19.7	10.6	9.9	0.7	17.6	1.4	2.1
平 均		17.6	62.7	46.4	13.2	5.6	14.7	0.6	16.0	1.3

表28によると、よく考えた18%、一応考えた63%、女子の場合、生涯の見とおしをたてにくいこともあろうが、それでも80%の人がまあまあ考えていた。なお、学科による差はあまりなかった。しかし、考えた程度は結婚までが46%と圧倒的に多い。そして、一生の見とおしをたてている人は15%程度であった。今後の女性に、自分の意志で人生設計をもち、それに合わせて進学先や就職先を

選び、また結婚の相手を考えることを望むことは無理であろうか。学歴別では普通科の男女共学に生涯の見とおしがやや多いが、共学による男性の影響ではなからうか。

(3) 一生を見とおした人の具体的な内容

(表29) 一生の具体的な計画内容

種類	ア. 趣味 学習	イ. 社会 的活動	ウ. 再就 職の仕事	エ. 一生 の職業
平均	5.8%	0.9	2.4	5.6

表29によると、趣味・学習と職業が6%程度でごくわずかである。男女別学の普通科では、趣味の内容が多く記入され、男女共学の普通科では職業の内容が多く記入されてあった。

(4) 人生設計を考えた時、誰かに相談したか。誰に相談したか。

(表30)

人生設計についての相談の状態

項目	ア. 相談 した	相 談 し た 人								イ. 相談し ない	ウ. 無答
		あ. 父	い. 母	う. 友達	え. 先輩	お. クラス 担当教師	か. クラブ 担当教師	き. 家庭 科教師	く. そ の他		
平均	45.6%	16.5	31.2	28.4	2.0	5.6	0	3.6	3.0	34.4	0.3

相談した人が平均46%

%いる。相談の相手は母親が31%、友達28%、父親17%、教師が4~6%

であった。女子高校生にとって身近な同性として母親に相談することはもともととも思われる。しかし、前述の主婦対象の調査全体から自己肯定の傾向がみえていた。もう少し広い視野から、時代のすう勢に適應する豊かな識見のもとでの指導も必要なのではなからうか。その指導には多くの資料をもとに客観的に判断できる教師があたりたい。とくに、女性である家庭科教師が自分の体験をもとに、さらに将来の社会や家庭を見とおした上で、また、家事労働や育児との関連において総合的な見地から適切な指導ができるのではなからうか。現に家庭一般の単元に家庭生活の設計、生活時間の計画、家事労働の能率、余暇の充実等が組まれているが、家族全般の計画のなかに女性としての生き方も含ませ掘り下げて指導していきたい。また、ホームルームの内容において個人としての生き方、進路の選択に関する問題が含まれている。それらに十分な時間をかけて適切な指導をしていきたいものである。

東洋大学教授、倉内史郎氏は「女性の生き方は男子にくらべ、いろいろある。どのパターンを選ぶかは学校在学中の進路指導において十分考慮されなければならない。これからの女性にとっては、職業と結びついたどのような生き方を選ぶか、そのためにどのような準備をなすべきか、自分の人生をきめていく上できわめて大事なことになってきている。¹³⁾」と。

VII まとめ

主婦の生活意識をいろいろな角度から調査し、それをもとにこれからの女性が真に生きがいを感じる生涯を過ごすには、どのような人生設計が考えられるかを検討してみた。また、現在的女子高校生がいだいている主婦像、将来設計等をも調査し、その実態をもとに高校女子教育の課題を探りたいと思ったのである。以下その要点をまとめてみる。

1. 主婦の生きがいについて。大いに感じているが26%で、とくに趣味や学習をもつ主婦と家庭外勤務の主婦に多かった。また、毎日の生活における空虚感の感じ方は、時々感ずるが平均40%で、主婦業だけ、自家営業、50才以上の主婦に多く、主婦+趣味・学習、家庭外勤務の主婦に少なかった。次に、生きがいの第一に平均では子供があがっていたが、趣味をもつ主婦は趣味を第一にあげており、家庭外勤務の主婦は子供と同程度に職業としての仕事をあげていた。しかし、自家営業や内職・パートの主婦

では、仕事を生きがいとする意識は少なかった。生きがいの要素には主体的、創造的な自己実現と他者との交流があげられるとのことであるが、後者の仕事にそれがやや欠けるのではなからうか。また、家事を生きがいとして多くあげたのは、51才以上、主婦業のみ、内職・パートの主婦で他に心を集中するものがないときに家事を生きがいと選ぶ傾向がみえた。藤井治枝氏は、「女性の生きがいのベスト③は①子供②趣味③仕事で家事そのものに生きがいを見出す主婦は専業でも一割程度、共稼ぎや家業ではほとんどない。¹⁴⁾」と。NHKのテレビ番組で20数人の有識者の婦人が集まり、女性の生きがいについての話し合いがもたれたが、その結論として「女性にとっても本当の生きがいは社会との連がりのある仕事をもって始めて感ずるのではないか。」ということであった。また、瀬戸内晴美氏は、「人間は本当に自分のやりたいことをやって、それが自分や主人や子供のためでなく、社会に少しでも役立っているという自覚があったときに生きがいを感じるのでないか。」と。¹⁵⁾また、見田宗介氏は、「趣味等余暇活動が中心的な生きがいとなるのは、それらが漫然と楽しまれている時でなく、むしろ、「仕事」に近い姿勢をもって立ち向かわれている時である。¹⁶⁾」と。私ども女性はそのほかにも、社会と直結する仕事、また、真剣に取り組む趣味等にも生きがいを求めていきたいものである。

2. 主婦がやりたいこと。56%、半数以上の主婦がその希望をもっていた。内容は趣味を習いたいが多かった。次が学習で、社会活動、就職希望はほとんどなかった。やれない理由は時間不足が主で、その他経済的理由、友達がいない等で家族の反対は少なかった。また、現在の生活をより充実するために、若い時に職業の選び方、特殊技能の習得、習いごとの練達、進学等について十分考慮すべきであったと反省している主婦が56%程度みえていた。

3. 育児、家事についての考え方。育児については主婦、女子高校生ともに、小学生の頃までは母親が家庭において世話をしたいが32%と一番多かったが、さらに、成人するまで家庭において世話をしたいが30%もあった。また、家事については、主婦、女子高校生ともに家族で分担すべきとの意見が50%程度で、主婦だけでやるべき、女の子のみに手伝わすべきとの意見が20%ずつあった。協力の実態は夫が25%、男の子12%、女の子46%で、男女の性差がみえていた。しかし、家庭外勤務、自家営業は家族で分担しているが57~66%もあり、主婦業だけの30%にくらべ家族の協力を得ていた。

4. これからの女性の生き方について。まず、学歴の程度は主婦は高校60%、短大20%、4年制大学15%で、女子高校生は高校59%、短大18%、4年制大学11%であった。女子高校生の大学希望が主婦のそれより少ないのは現実面の厳しさの故であろうか。次に、生活設計については、主婦、女子高校生ともに卒業→就職→結婚→家庭+趣味・学習のコースの希望が第一で、第二は女子高校生は共働き、主婦は再就職のコースを希望していた。前述のように家事は主婦が一人で女の子のみに手伝わすべきを合わせて40%もあり、また、子供の世話のために小学生の頃まで、さらに成人するまで家庭におるべきとの意見が60%もあること等から以上の希望がでるのも当然かも知れない。しかし、今後子供の数の減少、家事の社会化、機械化により家事労働の時間が短縮されるであろう。また、家事労働は欧米のように男女協力の形で行ないたい。現にそのような傾向がある。男女共修で小学校で学習した家庭科の芽を育てていきたいものである。竹中恵美子氏は、「家事労働を家事作業と家政に分類し、後

者は家族に対する精神的、教育的なつながりをもって家庭を創造していく管理運営的な仕事である。そして、前者の方はたちどころに妻以外の者の手にゆだねることができる労働が多い。¹⁷⁾」と。その家政の指導が女子の特性に応じた家庭科教育であろう。育児については成人するまで母親が家庭にいてやりたい気持ちも、最近、マスコミをにぎわしている青少年の不良化の問題等から考えられないこともないが、また一面、過保護や教育ママの意識がマイナスになっている場合も多い。将来、乳児期、さらに幼児期までの育児休暇や週休2日制も実現されるであろう。また、樋口恵子氏は、「一億総パートタイム化を提案したい。男の条件に女が合わせるのではなく、逆にいまある女の条件に男を合わせる方向は考えられないか。¹⁸⁾」と。さらに、ボーヴォワールは、「家庭の個人的な生活のなかにとじこめられた相対的存在としての地位に限定されている女性の状態は、自分の仕事や職業、社会的、政治的行動のなかで自己を実現する女性にくらべて劣るものである。¹⁹⁾」と。

それらの社会状態をふまえて未来に生きる女子高校生にもっと積極的に社会の一員として自己を発揮する方向に指導していききたい。高校女子教育においても、また、家庭科教育においても。

5. 女子高校生の将来設計について。女子高校生で生涯の生活設計にもとづいて進学や就職を選んでいる人は15%にすぎなかった。現在社会では、男性と異なり結婚による種々な規制の存在が考えられるが、意欲のあるところに道が開けるのではなかろうか。なお、進路決定の指導にあたっているのは、母親が31%と一番多かったが、その母親はこの調査から自己肯定が多く、従ってやや視野が狭い感じがした。進路指導、職業指導、生き方等は一応高校のH・Rにとりあげられているが、実際には特性に応じた深い指導がなされていないのではないかと。また、家庭科の授業にも家庭生活の設計として家族の総合計画の問題が扱われているが、そのなかに女性としての生き方についても十分考えさせる必要があるのではなかろうか。倉内史郎氏は、「男子にくらべ種々ある女性の生き方について在学中にどのような生き方を選ぶか、また、準備をすべきか十分進路指導すべき時になった。²⁰⁾」と。その指導にあたっては、自己の体験を通し、また、家庭経営との総合的な指導が可能な家庭科教師に期待したい。

おわりに

生きがいというきめ手のない問題を紙上調査によって結論づけることはなかなかむずかしく、表面的な検討に終わったことが反省される。来年度は夫の立場、男子高校生の立場からみた女性の生き方について調査してみたい。なお、これらの課題を家庭科の授業にとりあげて実践研究を行なうつもりである。

最後にこの研究にいろいろご指導いただいた青陵女子短大助教授伊藤フミ先生、また、研究協力員としてご援助いただいた新潟高校佐野京子先生、新潟女子高校本間チエ先生、沼垂高校浅見和子先生、さらに調査の折、ご協力いただいた12校および3園の先生方に心からお礼を申し上げたい。

参考文献

- 1, 6, 15 瀬戸内晴美：女の生きがい 週刊朝日ゼミナール8号(1970)P. 1
- 2, 4, 5, 8, 16 見田宗助：現代の生きがい 日本経済新聞社(1972)P. 51, 48, 63, 170
- 3, 10, 11, 14 藤井治枝：婦人教師12 明治図書(1971)P. 122 婦人教師11 P. 130, 129
- 12 高木葉子：婦人教師3 P. 76
- 7, 19 シモーヌ・ド・ボーヴォワール、朝吹登水子他訳：女性と知的創造 人文書院(1972)P. 9
- 9, 17 竹中恵美子：現代の婦人問題 創元社(1972)P. 148
- 13 倉内史郎ほか：職業のための教育 日本放送出版協会(1971)P. 170
- 18 朝日新聞学芸部編：男と女 朝日新聞社(1973)P. 206